

街のコミュニケーション・ツールとしての デジタルアーカイブ

—つづき「街の記憶」プロジェクト—

中村 雅子 今野 慎太郎 桜井 充 柴田 友梨也

デジタル・アーカイブ活動を地域の新たな場作りや、コミュニケーション・ツールとして捉えなおし、街づくりの参加の仕組みとしての可能性を探った。現在、プロジェクトはまだ進行中だが、ワークショップやフォーラム、取材など、モノとしてのデジタルアーカイブの蓄積とともに、活動を通じて、地域とのネットワークが拡大しつつあることが明らかになった。

キーワード：デジタル・アーカイブ、ネットワーク、地域活性化、市民参加、ワークショップ

1 デジタルアーカイブの「市民化」

街の歴史や情報を ICT で共有するというアイデアは、[渡辺]が紹介するように、コンピュータ・ネットワークの普及当初からさまざまに試みられてきた。中でも 1997 年から 2000 年にかけて行われた Living Memory Project は、デジタルメディアが特定の地域の場所性と結び付けられ、コミュニティの中で、地域の記憶や情報を媒介とした新しいコミュニケーションを作る試みとして示唆に富んでいる（注1）。市民デジタルアーカイブも、そのような文脈で捉えることができる活動である。

デジタルアーカイブへの取り組みは、日本では、1996 年に「デジタルアーカイブ推進協議会（JDAA）」が発足するなど、国が主導的な役割を果たした時期があるが、ここでは権利関係の検討や、記録、撮影、スキヤニング、データベース構築などの技術的検討に重点が置かれ、同協議会はおおむねその目的を達成したとして 2005 年に解散した。

しかしむしろそれ以降に、ボランティアな市民デジタルアーカイブの活動が活発化している。またその活動の

経緯や目的は[米本・栗原]に見るように、国の定義に縛られず、地域や団体によって問題意識も活動内容も多様である。国の施策と特に大きく異なるのは、市民デジタルアーカイブでは単に古い記録の保存、蓄積ではなく、他の街づくり、地域活性化の活動と連動しており、またインターネットなどを通じた情報提供やコミュニケーションだけでなく、対面のワークショップや紙媒体による成果の出版など、より広い活動やコミュニケーション手段の中に埋め込まれていることである。関東近県だけでも、早くから地域情報化に取り組んできている地域資料デジタル化研究会の「甲斐之庫」や「あおばみん」、「港南歴史協議会」、「横濱写真アルバム」など、それぞれ独自の問題意識の元に活動を行っている。

また現物のアーカイブ（図書館、博物館など）では、物理的な地域の記録の保管には、資料の管理や保存場所の問題が大きなハードルになるのに対して、デジタルアーカイブではこのような問題がなく、また検索性や一貫性、情報発信の容易さといった点でも優れている。そのような意味で財政的基盤や、設備などの乏しい草の根レベルで地域情報に取り組む上では、市民活動に多くのメリットがある方法である。近年では youtube, Flickr, GoogleMaps など、コンテンツを自由に投稿できるサイトやその API が一般に提供されるようになって、自らの活動に適したシステムをマッシュアップできる可能性も広がっている。

NAKAMURA Masako

東京都市大学環境情報学部教授

KONNO Shintaro

東京都市大学環境情報学部 4 年生

SAKURAI Mitsuru

東京都市大学環境情報学部 4 年生

SHIBATA Yuriya

東京都市大学環境情報学部 4 年生

2 街をつなぐツールとしての活動

都筑区について考えると、ニュータウン開発についても、それ以前からの都筑の歴史についても、急激な街の変化の中で失われつつある歴史や経緯を次世代に伝えたいと思う人々は多く、それぞれに活動しているが、その実践は個々に行われ、相互の人的、組織的なつながりは十分ではない。

例えばニュータウン開発に深く関わった方が、当時の貴重な資料を大量に保管しているが、一般の人々がそれにアクセスするのは難しい。また郷土の民俗資料を丁寧に収集し、個人で資料館を開いて地域に貢献している方がいるが、その活動は必ずしも広く知られていない。

ICTの活用によって、このような相互の活動を可視化し、互いのコミュニケーションを増すには、デジタルアーカイブは格好のツールである。しかし一方で、地域の歴史を知る高齢の方々には、パソコンやデジタルなコミュニケーションに対して苦手意識がある場合も少なくなく、そのことが活動への障壁になっている。そこで参加の場として、オンライン登録のようなデジタルな入口ばかりではなく、支援者のいるワークショップのように、対面の場やコミュニケーションの場作りを行ってネットワークや関心を広げていくことが重要である。

ICTによる地域活性化に関心がある人々と、昔からの歴史資料の継承に関心がある人々、というように従来あまり出会うチャンスがなかった異なるコミュニティの間を結びつけるツールとしてもデジタルアーカイブの可能性が期待できる。古くからの居住者の地域についての語りや情報だけでなく、最近都筑区に住居を構えたり、通勤通学などの関係を持つようになった新住民や来街者も、それぞれなりの都筑へのイメージや期待、あるいは要望や問題点を感じている。街への関わりが多様な人々が出会う場を物理的に、あるいはインターネット上で作れることもデジタルアーカイブ「活動」の重要な特徴である。

3 現代GPでの取り組み

以上の問題意識を踏まえて、現代GPではデジタルアーカイブ・プロジェクトを立ち上げ、地域のデジタルアーカイブ導入への助走となる諸活動に取り組んできた。

3.1 市民講座でのワークショップ

2008年の大学の市民講座では、互いの持つ思い出の写真を持ち寄り、そこから想起される記憶を共有するワークショップを行った。学生アシスタントの支援のもとで現代GPプロジェクトの学生が制作した「TimelineMap」に投稿された画像は1952年から2007年までと、さまざまな年代にわたっていた。



図1 市民講座でのワークショップの様子



図2 タイムラインマップへの参加者投稿 (1952年の街の写真)

3.2 イベントでつなぐ: つづきフォーラム

2009年には横浜祭のイベントとして、市民デジタルアーカイブの可能性についてのフォーラムを開催した。ニュータウン開発に深く関与した川手氏、個人で郷土資料館を運営する栗原氏、横浜開港150周年事業の「みんなでつくる横濱写真アルバム」の事務局メンバーでもある和田氏などにご参加頂いた。普段、学園祭にはあまり来場されない年配層の方々も含めて、会場が満席になる盛況だった。



図3 つづきフォーラムの様子



図5 開発以前からの都筑生まれの方々にアルバムを見ながら話をうかがう学生



図4 和田氏の講演

3. 3 デジタルアーカイブ・サイトの構築

これらの成果を踏まえて、現在、デジタルアーカイブのサイトと、関連活動を進めている。

プロジェクトの学生たちが、都筑生まれでニュータウン開発前からの変化を見てきた年配の方々や、開発に携わった関係者、開発初期入居者、最近入居してきた若い子育て中の母親層、地域に買い物客として来訪する人々、学生、などのさまざまな層の方々への取材を重ね、アーカイブ活動をそれらの人々の関心や活動と結びつけた形で活用してもらうためのスタイルを模索しているところである。

4 今後に向けたネットワークの拡大

2010年2月に東京都市大学環境情報学部と都筑区役所の間に関連協力協定が締結され、デジタルアーカイブ事業は、両者の緩やかな協力関係のもとに進められることになった。区役所は区制15周年事業として、区の持つ記録写真を中心に市民への公開、提供を進めるが、本学のデジタルアーカイブ・プロジェクトでは、公的な記録に残らない生活者の視点からの、さまざまな都筑のイメージを共有し、街づくりに生かすことを意図している。

またこのデジタルアーカイブの技術面では、学生が制作したTimelineMapなどのシステムの他、そのシステムが組み込まれた「横濱写真アルバム」とも連携して、データのアップロードと管理のシステムについて検討を重ねる予定である。

注

(注1)

THE LIVING MEMORY PROJECT

<http://web.media.mit.edu/~federico/living-memory/english/index.html>

参考文献

- [1] 渡辺保史 2001 情報デザイン入門—インターネット時代の表現術—平凡社新書
- [2] 米本祐太・栗原里奈 2010 市民デジタルアーカイブ活動の実態と変化 東京都市大学環境情報学部卒業論文